地理空間　**13**-2　73-85　2020

愛媛県鬼北町における座敷雛の発祥と地域的特色

池田彩乃*・淡野寧彦**

*四国名鉄運輸，**愛媛大学社会共創学部

本稿は，愛媛県鬼北町における座敷雛がいかにして発生し，その後の中止と復活を経たうえで地域行事の一つとして継承されてきた過程を分析した。これらにより，鬼北町の地域文化としての座敷雛の特徴や役割を明らかにすることを目的とした。

八幡浜市真穴地区が発祥とされる座敷雛は，20世紀前半に，同地区と鬼北町旧広見町の住民との間での婚姻関係の成立により伝播した。1990年代になって，きほく座敷雛保存会のメンバーが座敷雛展示を復活させ，その造園技術やメンバーの継続的確保などによって，座敷雛展示は次第に鬼北町における代表的な地域行事の一つとして定着した。さらに，道の駅での展示の開始や，鬼北町内外の組織と連携したイベントの実施など，座敷雛展示の拡大や継続は，地域に活力を与える一助として貢献した。

メンバーの高齢化を理由に，2019年にこの活動は終了したが，座敷雛展示は25年間にわたって継続されたことに加え，約100年前の地域間交流や人の往来を浮き彫りにしたことも評価されるべきである。

キーワード：雛祭り，座敷雛，住民活動，文化伝播，愛媛県鬼北町

Ⅰ　はじめに

今日の日本においては，地域振興を企図したさまざまな事業が全国各地で展開されている。観光を通じた地域振興への期待はその代表的な一つであるが，単に大勢の観光客が訪れる，いわゆるマスツーリズムの形態だけでなく，住民が主体となって地域の魅力を（再）発見・評価する観光まちづくりなど，多様な手法が取り入れられている。こうした取り組みは，単に経済的な効果にとどまらず，交流人口の増加や，住民の地域への愛着向上などに結びつく要素を持っている（深見・井出，2010：3-12）。また菊地（2018：212）が指摘するように，観光の醍醐味は，地域資源を掘り起こし，それらを保全しながら活用し，持続的な地域振興に結び付けることである。一時的な盛り上がりにとどまらない，地域の価値や魅力を構築することは，地域やそこに住む人々にとって重要なテーマであろう。さらに，従来の温泉観光地が停滞に直面するなかで，岩間（2017）は城崎温泉の観光まちづくりに注目し，観光業とは関わりのなかった住民や企業を，祭礼行事を用いた人間関係の構築によって取り込むことが，新たな地域活性化に結びついている実態を明らかにした。ほかにも，芸術を軸としたイベントを通じて，国内外から多くの観光客を獲得している例として，2010年より瀬戸内海地域で開催されている「瀬戸内国際芸術祭」が挙げられ，観光客への意識調査からは，高い満足度や再訪意欲がみられた（山本ほか，2014）。

地域の歴史や文化を活用した親しみやすい行事として，雛祭りを題材とした取り組みも各地でみられる。雛祭りは従来，家庭内で行われるものであるが，現在では，特定の地域内に多数の雛人形を展示したり，地域独自の雛人形や展示方法をアピールしたりするなどによって，多くの観光客が来訪する現象がみられる。こうしたイベントは1990～2000年代に広まり，全国で130以上のイベ

ントが存在する（古河，2018）。このなかで徳島県勝浦町の「ビッグひな祭り」は，比較的早い1988年に開始された。このイベントは，家庭内に収蔵されていた雛人形を集めて巨大な雛壇に展示するものであり，町固有の歴史や文化を特徴としたものではなかった。しかし，次第に創作的な飾り方の導入や広域的な観光ＰＲがなされると，ビッグひな祭りは広く全国的に認知され，今日まで継続されるものとなった（山田，2015）。さらにこうした手法が別地域にも広がり，集客性の高いイベントとして展開されていることも，山田や前出の古河（2018）で指摘されている。また筆者のうち淡野も，茨城県桜川市真壁町において，歴史的建造物群の保全や活用が進むなかで住民の自主的な取り組みとして雛祭りが開催され，毎年1カ月の間に10万人超の観光客が訪れる一大イベントとして定着したことを示した（淡野・呉羽，2006）。こうした動きは，地域の祭礼行事・文化の継承やまちづくりへの住民参加を促す要因として評価されるが，同時に伝統的な祭礼行事・文化の変質も引き起こしているとの指摘もある（碓田ほか，2007）。

愛媛県においても，後述するとおり，上記のような雛祭りイベントは複数みられるが，特徴的な形態として「座敷雛」の展示が存在する。多くの雛祭りにおいては，多数の雛人形が展示されたり，雛人形そのものに独自の特徴がみられたりする場合が多いが，愛媛県の座敷雛は，特定の場所で，雛人形の周囲に大掛かりな風景描写や関連する事物の配置（以下，造景）がなされた展示であり，筆者の管見の限り，全国的にみても稀有なものである。このなかでも八幡浜市真穴地区における座敷雛展示の知名度がとくに高く，前出の碓田ほか（2007）にもその存在が記されているが，本稿で取り上げる鬼北町旧広見町で開催される座敷雛に注目した情報媒体は少なく，その研究もみられない。

一方で鬼北町の座敷雛（図1）は，約25年にわたって，「きほく座敷雛保存会」（以下，保存会）に所属する鬼北町住民数人によって継続されてきた実績を有しており，毎年の展示には数千人が訪れる，町内でも一定規模の行事として根付いてきた。また先述の真穴地区における座敷雛展示との関係性が存在するが，こうした内容について言及した文献も存在しない。座敷雛展示に関わる住民が70～80歳代と高齢化したことを主な背景として，2019年を最後にこの座敷雛の展示は終了したが（淡野，2020），こうした文化的行事がいかにして他地域から伝播し，少数の住民有志によって継承されてきたのかについて記録・分析することには，学術的意義が認められるものと考えられる。以上より本稿は，愛媛県鬼北町における座敷雛がいかにして発生し，その後の中止と復活を経たうえで地域行事の一つとして継承されてきた過程を分析する。これらにより，鬼北町の地域文化としての座敷雛の特徴や役割を明らかにすることを目的とする。なお，本稿で取り上げる鬼北町旧広見町における座敷雛については，他のものとの混同を避けるため，特別な場合を除いて以下では「座敷雛展示」と記すこととする

以下，本稿の構成とともに研究方法を示す。Ⅱでは現在，地域行事として実施される雛祭りの特徴について愛媛県のものを中心に分析しつつ，座敷雛という形態の特異性を示す。また，座敷雛展示の訪問者の特徴についてアンケート調査により分析し，座敷雛展示に対する訪問者の認知や評価について考察する。これらをふまえながら，Ⅲでは鬼北町において座敷雛展示が実施された経緯と，その後の活動の拡大について現地調査をもとに分析する。さらにⅣでは，座敷雛展示の継続に必要不可欠であった保存会メンバーの存在と，その相互の結びつきについて，現地での聞き取り調

図1　愛媛県鬼北町における座敷雛展示（2018年）

（2018年3月　淡野撮影）

査をもとに明らかにする。最後にⅤで，鬼北町における座敷雛展示が，地域の文化としてどのように伝播・継承・活用されたのかを考察する。

なお，座敷雛展示の一連の準備工程についても記録を残すことも重要と考え，2018年の展示における一連の作業に関する調査も実施したが，その内容を全て記すと紙面の大幅な超過となることから，本稿では簡単な記述にとどめ，その内容は淡野（2020）において詳述した。

研究対象地域とする鬼北町は愛媛県の南西に位置し，高知県と接する（図2）。周囲を鬼ヶ城連峰や戸祇御前山，御在所山に囲まれた，山間部と盆地からなる地域である。2005年の平成の大合併を機に旧広見町と旧日吉村が合併し，現在の鬼北町となった。町域面積は241.9km²，人口は10,046（2018年10月現在）であり，人口は減少傾向が続いている。町の中心部は旧広見町の近永地区とその周辺部であり，座敷雛展示がなされる後述のＴ商店や道の駅森の三角ぼうしが立地している。

Ⅱ　鬼北町における座敷雛展示の特徴と認知

1．愛媛県における主な雛祭り行事と座敷雛の特異性

今日，地域振興などを目的とした雛祭りは全国各地で実施されているが，その典型例の一つは，Ⅰでも述べた徳島県勝浦町の「ビッグひな祭り」のように，特定の場所に大量の雛人形が設置されるものである。この行事は同一地名にちなんで千葉県勝浦町や和歌山県那智勝浦町でも開催されており，同種のものは筆者の管見の限りで全国20カ所以上におよぶ。こうした展示方法は，迫力の大きさを演出できるだけでなく，地域住民らが自ら所有しながらも長らく展示していなかった

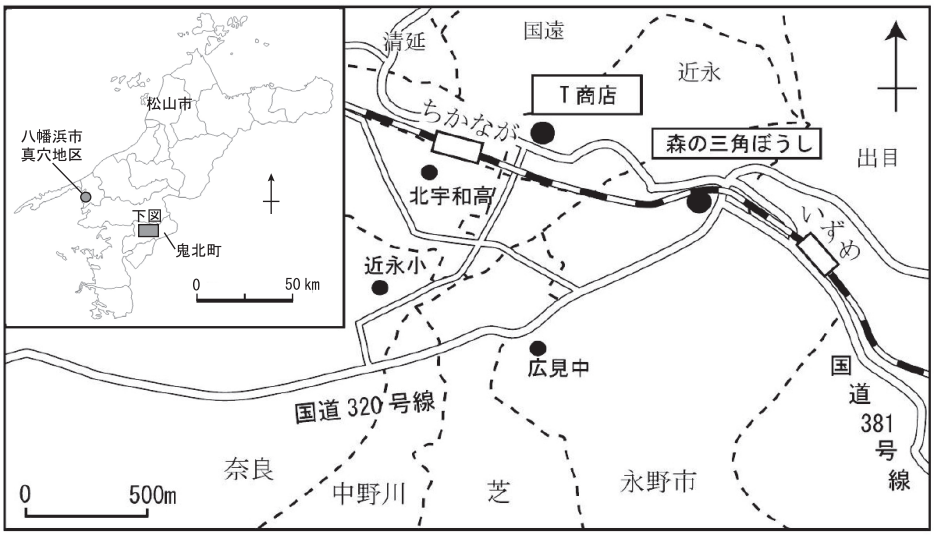

図2　研究対象地域

雛人形を率先して提供してくれる（淡野・呉羽，2006）ために，行事にかかる費用節減も期待できる。また，地域の伝統的な雛飾りを由来とする行事も多数存在し，1998年に静岡県東伊豆町で開始された「雛のつるし飾りまつり」がこの一例である。同地は江戸期につるし飾りが発祥した地という歴史を有する。

こうした雛祭りでは，雛人形そのものの展示を重視する傾向が強く，本稿で取り上げる座敷雛のように，雛人形の周囲に造景を設ける手法はほとんどみられない。また，各地の雛祭りでは，訪問者に対する雛人形の作成体験や着物の着付け体験，展示会場などを巡るスタンプラリーなどのイベントも組み合わされる場合も多い。

次に，愛媛県において現在開催されている雛祭り行事に着目すると，砥部町においては砥部焼の手法を用い作られた雛人形が展示・販売されている。また久万高原町では，「くままちひなまつり」がある。商店街の商店内や軒先に，商店が手を加えた雛人形が飾られるほか，2000体の雛人形で作られた雛壇ピラミッドがあけぼの座という建物に設置される。南予地方においては，西予市の愛媛県歴史文化博物館で着付けのワークショップが行われている。また宇和島市においても，古い町並みの中に雛人形を飾る岩松ひな回廊がある[1)]。

このように愛媛県においても，雛祭りの実施方法に違いはあるが，雛人形というモノ自体に焦点を当てた行事が多い。これに対して座敷雛を中心とした雛祭りは，2018年時点で八幡浜市真穴地区，宇和島市に存在する南楽園，鬼北町旧日吉村，そして保存会による鬼北町旧広見町の2ヵ所の計5ヵ所で実施されるに過ぎない。さらにその発祥は，八幡浜市真穴地区によるものとされる。まあなの座敷雛ウェブページを参考に淡野（2020）でも記したとおり，真穴地区の座敷雛は長女が生まれた家が旧暦の初節句の2日間実施するもので，1783（天明3）年に創設された穴井歌舞伎が起源とされる。現在は展示期間中に数万人の観光客が訪れる。また，宇和島市南楽園の座敷雛展示は，梅まつりの時期に合わせて真穴座敷雛保存会の協力のもと作成されている。鬼北町旧日吉村の座敷雛は，保存会のものを参考に，2012年頃から旧

日吉村住民によって開始されたものである。

以上のように，愛媛県内でみられる座敷雛の展示は，真穴地区で発祥した形態が県南部の少数の地域にもたらされたものと位置付けられ，他の雛祭りとは異なる特徴を有している。

２．鬼北町における座敷雛展示に対する訪問・認知状況

2017年3月19日～4月4日の17日間にかけて，鬼北町内のＴ商店で開催された座敷雛展示において，3月19（日）・20（祝）・23（木）・30（木）日の計4日間，訪問者に対するアンケート調査を行い，130人から回答を得た。訪問者の在住地は愛媛県在住が115人，高知県が8人，広島県と京都府が2人などであった。また愛媛県内の市町別の人数は，宇和島市が47人，鬼北町が35人，松野町と松山市が8人，西予市が6人などであった（図3）。

訪問者の同伴者について「ひとりで」,「家族と」,「友人と」の分類でみると，県外および愛媛県の東・中部からの訪問者は「家族と」一緒に来たという回答が27人中22人（81%）と多数を占めた。こうした人々は，春休みの帰省中や，外出先の一つとして訪れていた。一方，県南部からの訪問者では，103人中,「家族と」が52人と最も多くなったものの,「ひとりで」または「友人と」も各25％程度を占め，やや異なる傾向を示した。後者の回答の中には「散歩のついでに寄った」,「T商店への買い物のついでに」という日常行動の中での行動とするものが散見された。

次に訪問者の年齢層についてみると，県内外を問わず60歳代以上が多く，全体の6割強を占めた。一方，40歳代以下の訪問者のほとんどは鬼北町または宇和島市の在住であった。座敷雛展示の訪問回数については，初めての訪問者は34人（26.2%）にとどまり，少なくとも5回以上訪問したことがあると答えた者が，鬼北町在住者で約75％，宇和島市在住者で約45％を占めた。保存会メンバーからの聞き取りによれば，座敷雛展示に合わせて，T商店が3000部程度のチラシを作成し，鬼北町および宇和島市の新聞折り込みを行っている。このことが，鬼北町内はもとより，宇和島市在住者においても座敷雛展示への認知や関心

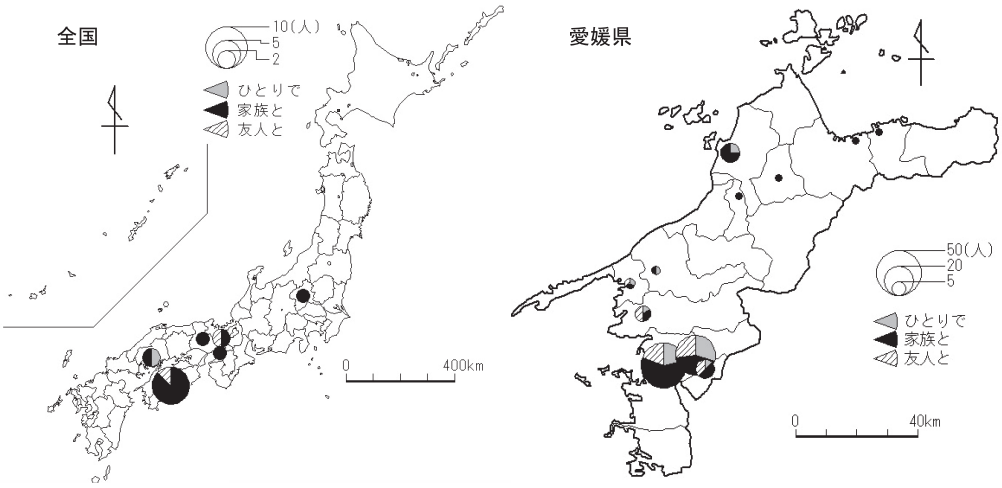

図3　鬼北町における座敷雛展示の訪問者の居住地（2017年）

（アンケート調査により作成）

が向上し，実際の訪問に結びついていることが推測される。

Ⅲ　鬼北町における座敷雛展示の背景と継承

1．座敷雛の伝播と展示にいたる経緯

保存会棟梁のＡ氏によれば，Ａ氏が幼少の1930年代頃に，鬼北町の中野川地区から国道320号線に沿って西側の地区において，座敷雛を実施した家が数戸存在した。これらの家では，八幡浜市真穴地区から結婚によって鬼北町に移り住んだ者がいたという。図4中央に示す1937年生まれのＡ氏の場合，その父が1935年頃に真穴地区から婿入りし，Ａ氏母と結婚した。図の上部で示されるように，Ａ氏母の叔母は，これ以前の1910年代に，逆に真穴地区の男性のもとへ嫁いでおり，その後の真穴地区内での近所付き合いを介して，

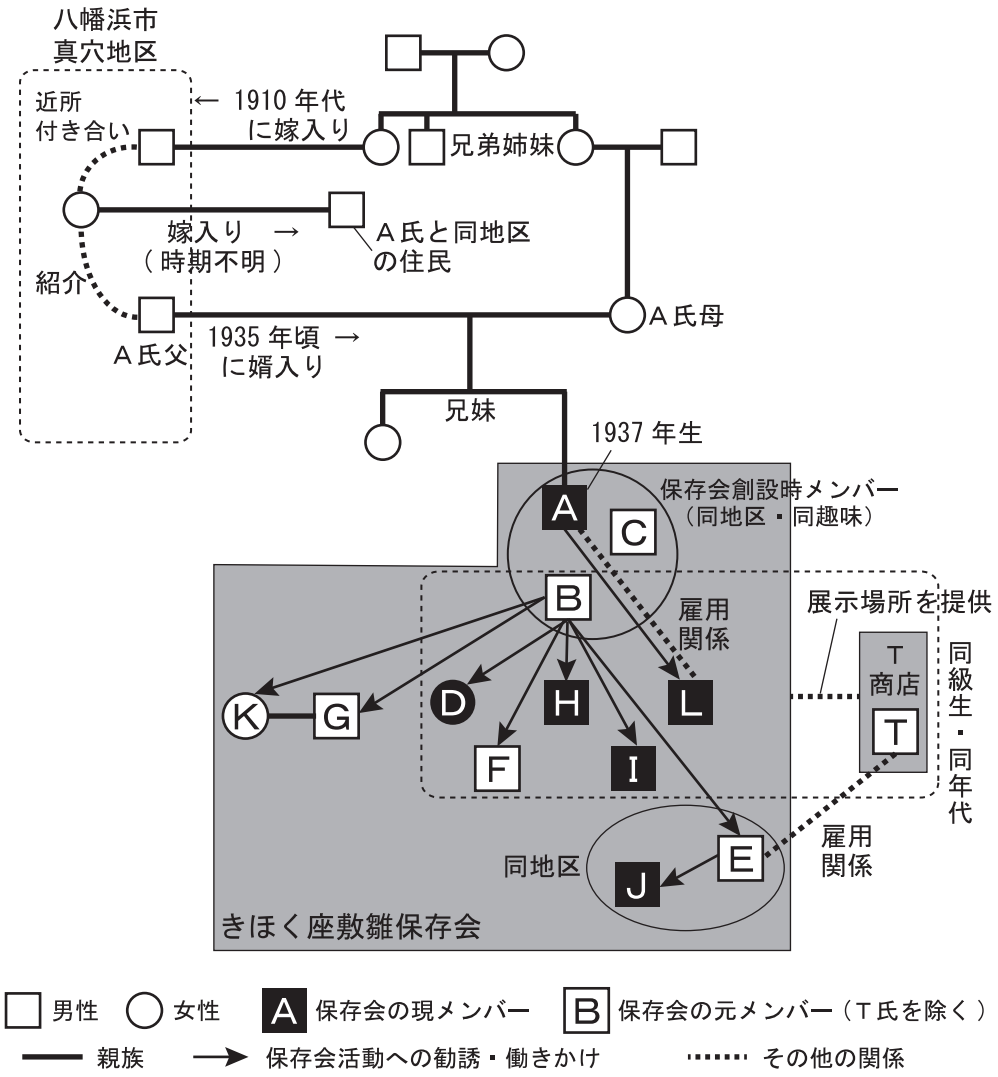

図4　鬼北町における座敷雛の伝播と「きほく座敷雛保存会」メンバーの関係性
（聞き取り調査により作成）

Ａ氏父の婿入りへとつながったとされる。他にも，Ａ氏が把握するだけで計6例，真穴地区との間で縁組が行われたという[2)]。

Ａ氏宅では，1938年にＡ氏の妹（長女）が生まれた際，その初節句を祝うために座敷雛が催され，Ａ氏父の兄らが展示の手伝いに訪れた。座敷雛のスペースはおよそ180×180cmの2畳ほどで，中央奥に雛壇が設置され，その横には雛人形よりも大型の「おぼこ人形」と呼ばれる市松人形が置かれた。さらにこれらを囲うように松の木の枝や花，石などが造景として設置された。またＡ氏は，奈良地区の成川集落で行われた座敷雛の写真を見た記憶があり，そこでは道中雛や馬に乗った雛人形，苔が松の枝とともに飾られていた。

一方，同じく保存会発足時のメンバーであるＢ氏（1945年生）もまた，父親がＢ氏の妹の節句の際に座敷雛を作ったことを記憶していた。当時のＢ氏宅には桜の木が植わっていたことから，Ｂ氏の父親は桜や柳の枝を雛人形とともに飾りつけ，近隣住民が見物に訪れたという。Ｂ氏もまた，成川集落で見た座敷雛がとくに印象的であったと言い，先述のＡ氏の記憶とも合致する。しかし，こうした座敷雛の製作は，第二次世界大戦の影響によって生活そのものが圧迫されたことにより，戦後まもなくには中止されてしまった。

鬼北町において座敷雛が復活したのは，1994年のことである。この前年，Ｂ氏は庭仕事による縁でかねてから懇意にしていたＴ商店を営むＴ氏と，地域行事の際に顔を合わせる機会があった。この際，Ｔ氏がＢ氏を真穴地区の座敷雛に誘うと，Ｂ氏は自らが小学生の頃，座敷雛を見たことのある経験をＴ氏に伝えた。これに対してＴ氏は，費用は自身が提供するので，鬼北町でも座敷雛をやってみないかと提案した。そこでＢ氏は，造園や盆栽といった共通の趣味を持ち，交流のあったＡ氏やＣ氏を誘い，真穴地区の座敷雛を見学した。この経験と自身の記憶を参考にしながら，3人は保存会を立ち上げ，「きほくの里のひなまつり」として1994年から座敷雛展示を開始した。

２．座敷雛展示活動の拡大

座敷雛展示はすべて，保存会のメンバーのみによって担われてきたが，メンバー数は計12人に過ぎず，Ａ氏以外ではメンバーの引退や新規加入などが発生している（図5）。なお，メンバーのうち，女性はＤ氏とＫ氏の2人のみである。メンバーの確保や相互の関係性などについては，次章にて詳述する。

最初の座敷雛展示は，Ｔ商店が管理する建物の一角を用いて実施された。当初は4畳半程度の広さの展示であったが，そこから回を重ねるごとに，次第に展示スペースは広くなっていった。なお，Ｔ商店敷地内には，自動車9台分の駐車場が確保され，座敷雛展示を見る際に利用することができる。1996年の展示からは，新たにＤ氏がメンバーに加わり，座敷雛展示が終了するまでメンバーとして活動した。また同年，訪問者数の計測をメンバーがカウンターを用いて行う方法から，訪問者が任意に名簿に記入する方法へ変更された。1999年にＣ氏が亡くなった際には，新たにＥ氏とＦ氏の2人が加わった。

2003年にＴ商店の新店舗が従来の店舗に隣接して建設された後は，旧店舗は倉庫として利用されることとなり，座敷雛展示は旧店舗内で実施されることとなった。2003年にＦ氏が活動から外れたものの，Ｇ氏が加わり，翌年にはＨ氏とＩ氏も参加し，メンバー数は7人にまで増加した。座敷雛展示も10年目を迎えたことから，2004年には鬼北町北部の愛治地区で活動する「愛治ちんどん」をＴ商店に招き，座敷雛展示を盛り上げた。鬼北町内での認知も高まりつつあったことか

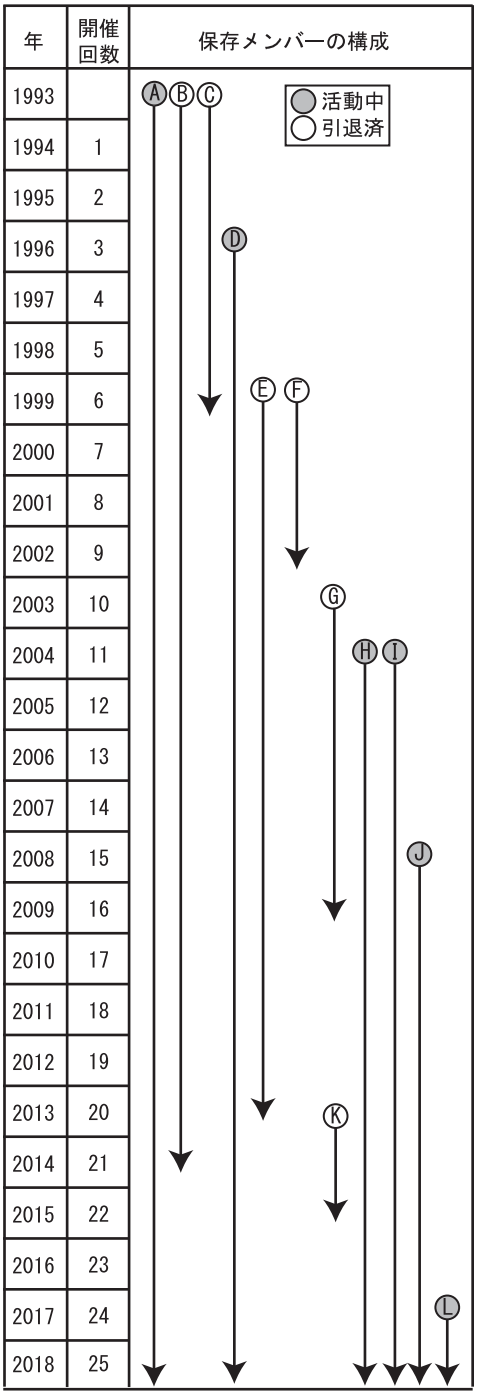

図5　きほく座敷雛保存会メンバーの構成
（1993－2018年）

（聞き取り調査により作成）

ら，2006年からは依頼を受けて道の駅森の三角ぼうしでも座敷雛展示を行うこととなった。さらに2008年からは，Ｊ氏が新たに加わったこともあり，Ｔ商店での座敷雛展示を10畳から18畳に拡大した。その後，メンバーの高齢化や逝去などを理由にメンバーの入れ替わりが起こったが，毎年，おおむね5人程度が活動に参加し，展示が継続された。

また，2011年の東日本大震災発生後，Ｔ商店が被災地応援などを目的に福島県土湯温泉の名産品である土湯こけしを購入したことが縁となり，土湯温泉の女将ら10人が鬼北町に来訪し，座敷雛を見学した。これをきっかけとして，2014年に土湯温泉サイドから座敷雛の出張展示の依頼が保存会になされた。この際には，棟梁のＡ氏とＪ氏の2人が現地を訪れ，現地の土湯こけしも含めた座敷雛展示を行った。2016年からは，森の三角ぼうしのモニュメントである鬼王丸の小型模型を座敷雛展示の一部に取り入れるといった工夫もなされた。ほかにも，先述のとおり，2012年には旧日吉村住民が新たに座敷雛を活用した催しを企画するに際し，Ａ氏らがその指導・助言に当たった。

３．座敷雛展示の特徴と作業工程

座敷雛展示は，その中央部に雛壇と雛人形が設置されるものの，その周辺には，雛壇よりも広いスペースを取って造景が施され，これらはすべて手作業である。この特徴や作業工程については淡野（2020）で詳述しているため，本稿ではごく簡単に触れるにとどめる。

まず，花や木，山などの造景に用いる素材はすべて，本物の植物や土，石などであるため，実際の展示作業を開始する以前の3月初旬頃から採取作業が開始される。座敷雛展示が終わる4月初旬までの約1カ月間，植物が枯れてしまわないよう，

水やりなどの管理を継続して行う必要がある。展示作業は，最奥部の屏風の設置，その手前に置かれる雛壇の設置，その周囲の造景製作という流れで進められ，展示スペースがやや狭い森の三角ぼうしのもので約3日間，Ｔ商店のものでは約4日間を要する。公開中のおよそ半月程度は，Ｔ商店の座敷雛展示において，メンバー２人が毎日交代で滞在し，訪問者への案内業務に従事する。

上記の様々な作業が，毎年，数人のメンバーのみによって継続されてきたが，活動が終了した2019年時点では，その全員が70歳代以上の高齢者であり，活動の継続が困難と判断される大きな要因となった。

Ⅳ　保存会メンバーの結びつきと役割

１．Ｂ氏によるメンバーの継続的確保

先述のとおり，保存会はＡ，Ｂ，Ｃ氏の3人によって発足したが，その後のメンバーの確保においては，Ｂ氏の果たす役割が非常に大きかった。図4の下部でも示したとおり，Ｂ氏はＡ，Ｃ氏と顔なじみで活動開始時に協力を得られたほか，その後もＤ，Ｅ，Ｆ，Ｇ，Ｈ，Ｉ，Ｋ氏の計7人の勧誘を実現している。

表1はＢ氏からみた保存会メンバーとの関係性である。まず棟梁のＡ氏とはＢ氏が高校生の頃からの付き合いであり，同じ地区に居住することもあって，Ｂ氏宅の牛をＡ氏のトラックにて宇和島市内の闘牛場に輸送してもらうなどの縁があった。またいずれも造園に関心があり，Ａ氏はトラック運転手を辞めた後，自身で造園の会社を設立するほどであった。またＣ氏も同じ地区に居住し，ともに園芸クラブに加入しているなど，共通の趣味があった。

一方，保存会の活動が開始された後に加入したメンバーには，Ｂ氏の同級生である者が複数存在する。このうちＤ氏は最も早くに勧誘を受けてメンバーとなったが，その主な理由は，Ｄ氏が座敷雛展示の造景に活用可能な家屋の模型を製作していたことや，雛壇の飾りつけにも長けていたことであった。また2004年にそろって加入したＨ，Ｉ氏の２人は，座敷雛展示に関心を持っていたほか，定年退職するなどして時間に融通のつきやすい立場であった。一方，Ｅ氏はＴ商店の元従業員でＢ氏と顔見知りであり，Ｇ氏はＢ氏の顧客で，かつ共通の趣味があったことから，勧誘は比較的容易であった。またＬ氏は，雇用主であるＡ氏から勧誘されたことをきっかけに2017年より活動に加わったが，やはりＢ氏やＤ氏らとは同級生であり，旧知の間柄であった。

なお，座敷雛展示のきっかけとなったＢ氏とＴ氏の会話についても，両氏が古くからの顔なじみであったことに起因しており，この関係は座敷雛展示の場所を確保できたことにも寄与した。

２．保存会メンバーの持つ技術や意識と，活動に果たす役割

座敷雛展示が長期に渡って継続された背景として，保存会メンバーの持つ技術や意識も見逃すことはできない。なかでも，座敷雛展示の造景製作に果たすＡ氏の技術と発想力は，作業工程において不可欠のものであった。Ａ氏は保存会発足時からのメンバーであり，Ｂ氏らの世代よりも8年ほど年上ということもあるが，30歳代半ばから造園会社を経営してきたことによる技術や知識を有することから，棟梁と呼ばれるにふさわしいリーダーシップを取りながら，活動の継続に寄与してきた。毎年の座敷雛展示に際して，造景に必要となる素材の入手や準備作業はもとより，展示全体のレイアウトもＡ氏の構想による面が非常に大きく，他のメンバーからは座敷雛展示が最終的にどのようなものになるのかは棟梁にしかわからない，といった具合に信頼されている[3)]。

表1　きほく座敷雛保存会のＢ氏からみた他メンバーとの関係性

メンバー	Ｂ氏との関係	交友のきっかけ・勧誘理由
Ａ氏	Ｂ氏が高校１年生の頃からの付き合い	Ａ氏とは，Ｂ氏が高校１年生のころからの付き合い。Ａ氏は昔かつて，トラックの運転手であり，Ｂ氏の実家では牛を飼っていた。牛を宇和島の闘牛に連れていく際，Ａ氏のトラックに載せてもらった。同じ中野川地区に住む同士で，趣味が同じ，また造園をしていて庭や盆栽に心得があるということから、Ａ氏を真穴の座敷雛見学に誘った。
Ｃ氏	同地区内の盆栽・酒飲み仲間	Ｃ氏とは同じ園芸クラブに入っており、中野川地区に住む同士ということで，時折晩酌などをする仲であった。同じ趣味を持ち，気が合うことから一緒に活動しやすいと思い，勧誘した。
Ｄ氏	小・中学校の同級生で同じ趣味の友人	座敷雛は鬼北の里山を表現するという方向性であるので，家屋があったほうがそれらしくなると思い，かねてより趣味で家屋模型を作っていたＤ氏に借り受けることになった。その後，苔や盆栽が好きで，雛壇の飾り付けもでき，さらに家の模型を借りやすくなるという理由で勧誘した。
Ｅ氏	座敷雛展示場であるＴ商店の元従業員	Ｅ氏の父も座敷雛のような雛祭りを過去にやっており，Ｅ氏自身が座敷雛展示を行っているＴ商店の従業員であったため，保存会メンバーとは，Ｔ商店で交流があった。Ｂ氏は「Ｅの家も座敷雛をやっていたのだから，昔少し手伝ったことがあるやろ。Ｔ商店の仕事を定年で辞めたら手伝わんか」とＥ氏を勧誘した。
Ｋ氏・Ｇ氏（Ｋ氏妻）	前職及び現職の仕事の相手で座敷雛の常連客	Ｋ氏が勤めていたJRの官舎へ，当時，惣菜配達サービスの仕事に就いていたＢ氏が，惣菜を配達していた頃に交友が始まり，勧誘時は10年以上の付き合いであった。またＢ氏は造園の仕事もしていたため，Ｋ氏の庭の手入れに行くことがあり，そこでも交流があった。さらにＫ氏は客としてよく座敷雛を見に来ていたことから，Ｋ氏も座敷雛のような文化や装飾が好きであることは明白だった。それならば手伝ってもらおうと，Ｋ氏を引き入れた。 Ｇ氏はＫ氏の妻であり，Ｋ氏と同じように盆栽等が好きだった。夫であるＫ氏との縁があり、座敷雛のメンバーも少なくなったためＢ氏が誘った。
Ｈ氏	小・中学校の同級生で座敷雛の常連客	Ｈ氏は，昔は仕事の都合でいろいろな所へ行っていたが，宇和島付近に来るたびに座敷雛を見に来ていた。Ｂ氏とは以前に交友があり、かつ座敷雛に興味があり、仕事も定期的に休みが取れそうな人物であったため，勧誘した。
Ｉ氏	小・中学校の同級生	Ｉ氏はすでに職を引退した身であり，年度末に時間が取れそうな人物であったため，勧誘した。

（聞き取り調査により作成）

またＤ氏は，先述のとおり，自作の家屋模型を座敷雛展示に毎年貸し出している。家屋模型は数種類存在するが，例えば屋根を板状に組み合わせたような見た目のパーツを引っ越し用のやや太めのひもで表現したり，内装にも家具や掛け軸などを自作して配置したりするなど，非常に細かいつくりとなっている。ほかにもＤ氏は，小動物に見立てた細工も自作して用いており，展示に色を添えている。Ｄ氏は現在活動するメンバーの中で唯一の女性であり，雛人形の飾りつけにおいて，中心的な役割を果たしている。

Ｈ氏は2010年以降，保存会の会計管理を続けている。さらに，保存会の活動について詳細に記した記録も個人的に作成するなど，座敷雛展示の継続に資する情報の整理・収集に取り組んできた。展示作業においても，他のメンバーが特定の作業に集中するのを見ながら，Ｈ氏は掃除や片付けといった補助的役割についても重視して作業に従事している。また，展示用に採取した植物の保存場所の提供と管理もＨ氏が担っている。

これらのほか，Ｉ氏はＨ氏の前の会計担当者であり，Ｊ氏は展示中の当番表の作成などを行って

いる。それぞれのメンバーが，自身が可能な範囲で保存会の活動に取り組んでおり，実際に座敷雛展示に取り組むうち，メンバー間には最初は何もないところに，作ってるうちに楽しくなるといった感情が醸成されるという。このことが，メンバーそれぞれが肉体的な負担を感じつつも，座敷雛展示を継続するモチベーションにつながっているとの発言もあった。

以上のように，座敷雛展示は人数としてはごく少数の保存会メンバーの技術や密接な人間関係によって支えられてきた。メンバーの中でもごく限られた人物のみが経験した座敷雛の記憶が，鬼北町の地域的要素も取り入れられながら，鬼北町の恒例行事にまで発展したのである。

Ⅴ　おわりに

本稿は，愛媛県鬼北町における座敷雛がいかにして発生し，その後の中止と復活を経たうえで地域行事の一つとして継承されてきた過程を分析した。これらにより，鬼北町の地域文化としての座敷雛の特徴や役割を明らかにすることを目的とした。

八幡浜市真穴地区が発祥とされる座敷雛は，20世紀前半に，同地区と鬼北町旧広見町の住民との間での婚姻関係の成立により，伝播することとなった。こうした関係性が両地域で発生した要因を突き止めるまでにはいたらなかったが，この婚姻によって生まれた子供にとって，座敷雛は強く記憶に残るものとなった。

1990年代になって，この記憶を有するＡ氏らが座敷雛展示を復活させると，Ａ氏を中心とする造園技術と，Ｂ氏によるメンバーの継続的確保，さらにＴ氏によるサポートなどによって，座敷雛展示は次第に鬼北町における代表的な地域行事の一つとして定着していった。さらに，道の駅での展示の開始や，鬼北町内外の組織と連携したイベントの実施など，座敷雛展示の拡大や継続は，地域に活力を与える一助として貢献してきたものと考えられる。

鬼北町における座敷雛展示は，地域において脈々と受け継がれてきた文化とは違い，いわば特定の個人の記憶や来歴に帰する要素が強く，やや特殊なケースとも推測される。しかし鬼北町で生まれ，幼少期に座敷雛に触れた者にとって，その記憶は故郷の文化であり，かつ座敷雛展示を復活させる際には，その造景に鬼北町の自然風景を取り入れるなど，地域の特色も包含するものとなった。かつて真穴地区から伝播した座敷雛の文化は，鬼北町で若干変化しつつも継承され，復活後は地域の代表的な雛祭り行事と認識されるに至ったのである。

メンバーの高齢化を理由に，2019年に座敷雛展示は終了を迎えたが，四半世紀にわたってごく少人数で座敷雛展示を支え続けたメンバーらの功績は大きい。それはまた，展示の続いた期間のみならず，およそ100年前の地域間交流や人の往来を浮き彫りにしたものでもあり，地域の歴史の新たな1ページを織りなすものといえる。本稿が，その歴史や記憶を後世に語り継ぐための一助となることを願いたい。

［付記］

本稿は著者の池田が2018年1月に愛媛大学法文学部に提出した卒業論文をベースとし，その後，指導教員であった淡野が追加調査のうえ，加筆修正したものである。

本稿を作成するにあたり，きほく座敷雛保存会の上本與忠氏をはじめとする保存会メンバーの皆様には，好意的に受け入れていただき、多大なるご協力を賜った。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本稿の骨子は、2018 年6月16 日に開催された地理空間学会2018 年（ 第11 回）大会において発表した。

注

1) 愛媛県内で過去に実施されてきた主だった雛祭り行事について，愛媛県史編纂委員会編（1984）の記述を参考にすると，例えば愛媛県東予地方の今治市大三島町肥海では，母屋の軒に小枝と柳の枝を取り合わせたものを，2～3尺（約60～90㎝）おきに挿し，親類に搗いた餅を配っていた。松山市にも同様の風習があったとされる。また周桑郡では，節供後に女児が生まれれば初雛を贈り，旧暦の2月28日に初節句を祝ったという。中予地方の松山市においては，男児が生まれた場合であっても雛人形で祝う風習があったとされている。ただしこれらは現在，広く知られる地域行事としては継続されていない。また，こうした行事の特徴は，座敷雛のそれとは異なる点が多い。
2) 愛媛県史編纂委員会編（1984）の「第七章　民俗芸能」や「第八章　人の一生」,「第九章　年中行事」では，真穴地区の座敷雛に関する記述がわずかにみられる（316）が，鬼北町の座敷雛や真穴地区との間での通婚に関する記載は存在しない。広見町誌編さん委員会（1985）においても，こうした内容の記載はみられない.
3) 2019年の座敷雛展示終了後も，Ａ氏は自宅倉庫において1人で座敷雛を製作しており，座敷雛に対する強い思い入れと高い技術力がうかがわれる。

文　献

愛媛県史編纂委員会編（1984）:『愛媛県史　民俗（下）』愛媛県.

岩間絹世（2017）：城崎温泉における観光まちづくりの展開－リーダー集団の人間関係に着目して－. E-journal GEO，**12**，59-73.

碓田智子・西岡陽子・岩間　香・増井正哉（2007）：祭礼住文化の継承の視点からみた住まいとまちづくりに関する研究．住宅総合研究財団研究論文集，**33**，77-88.

菊地俊夫（2018）:「観光地域研究の可能性と社会的貢献」菊地俊夫編『ツーリズムの地理学：観光から考える地域の魅力』二宮書店，212-221.

古河佳子（2018）：地域振興の全国的展開と開催地域間の連携－観光ひなまつりを事例として－．日本地理学会発表集，**93**，308.

淡野寧彦・呉羽正昭（2006）：茨城県桜川市真壁町における町並み保全活動と地域活性化．茨城地理，**7**，21-36.

淡野寧彦（2020）：愛媛県鬼北町における座敷雛展示の作業工程とその記録化．愛媛大学社会共創学部紀要，**4**(1)，6-19.

広見町誌編さん委員会（1985）:『広見町誌』広見町.

深見　聡・井出　明編（2010）:『観光とまちづくり：地域を活かす新しい視点』古今書院.

まあなの座敷雛ウェブページ
http://maana-zashikibina.com/
（最終閲覧日：2018年5月26日）

山田慎也（2015）：地域おこしとしての雛祭り－徳島県勝浦町のビッグひな祭りの事例を通して－．国立歴史民俗博物館研究報告，**193**，95-112.

山本暁美・川原　晋・原　直行（2014）：地域振興における芸術・文化活動の役割と影響－2013瀬戸内国際芸術祭訪問者意識調査報告－．観光科学研究，**7**，59-64.

Origins and Regional Characteristics of "Zashikibina" (one of the doll festivals) in Kihoku Town, Ehime Prefecture

IKEDA Ayano* and TANNO Yasuhiko**
*Shikoku Meitetsu Transportation
**Faculty of Collaborative Regional Innovation, Ehime University

Keywords: Doll Festival, Zashikibina (one of the doll festivals), Neighborhood Activity, Cultural Diffusion, Kihoku Town, Ehime Prefecture